万葉集より

海の底沖つ白波龍田山　いつか越えなむ妹があたり見む

家にあらば妹が手まかむ　草枕旅に臥やせるこの旅人あはれ

ひともねのうらぶれ居るに龍田山　御馬近づかば忘らしなむか

朝霞止まずたなびく龍田山　舟出せむ日は我れ恋ひむかも

白雲の　龍田の山の夕暮れに　うち越え行けば　瀧の上の、桜の花は

咲きたるは　散り過ぎにけり　ふふめるは咲　き継ぎぬべし　こちごちの

花の盛りに　あらずとも　君がみ行きは　今にしあるべし

雁がねの来鳴きしなへに韓衣龍田の山はもみちそめたり

妹が紐解くと結びて龍田山今こそもみちそめてありけれ

夕されば雁の越え行く龍田山しぐれに競ひ色づきにけり

秋されば雁飛び越ゆる龍田山立ちても居ても君をしぞ思ふ

秋されば雁飛び越ゆる龍田山立ちても居ても君をしぞ思ふ

夕されば雁の越え行く龍田山しぐれに競ひ色づきにけり

龍田山見つつ越えきし桜花　散りか過ぎなむ我が帰るとに

大伴の御津の泊りに船泊めて龍田の山をいつか越え行かむ